

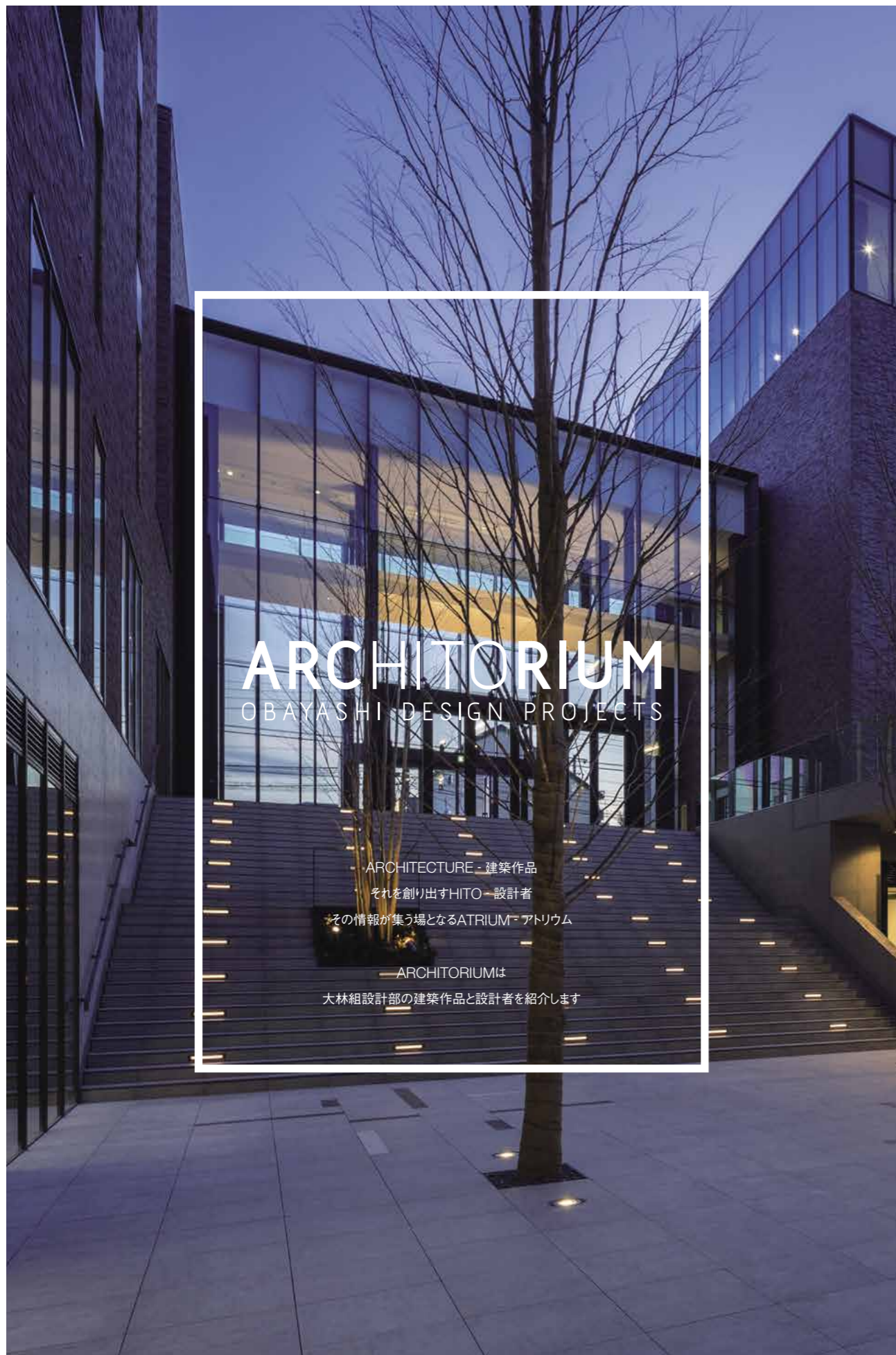
ARCHITORIUM

OBAYASHI DESIGN PROJECTS



feature

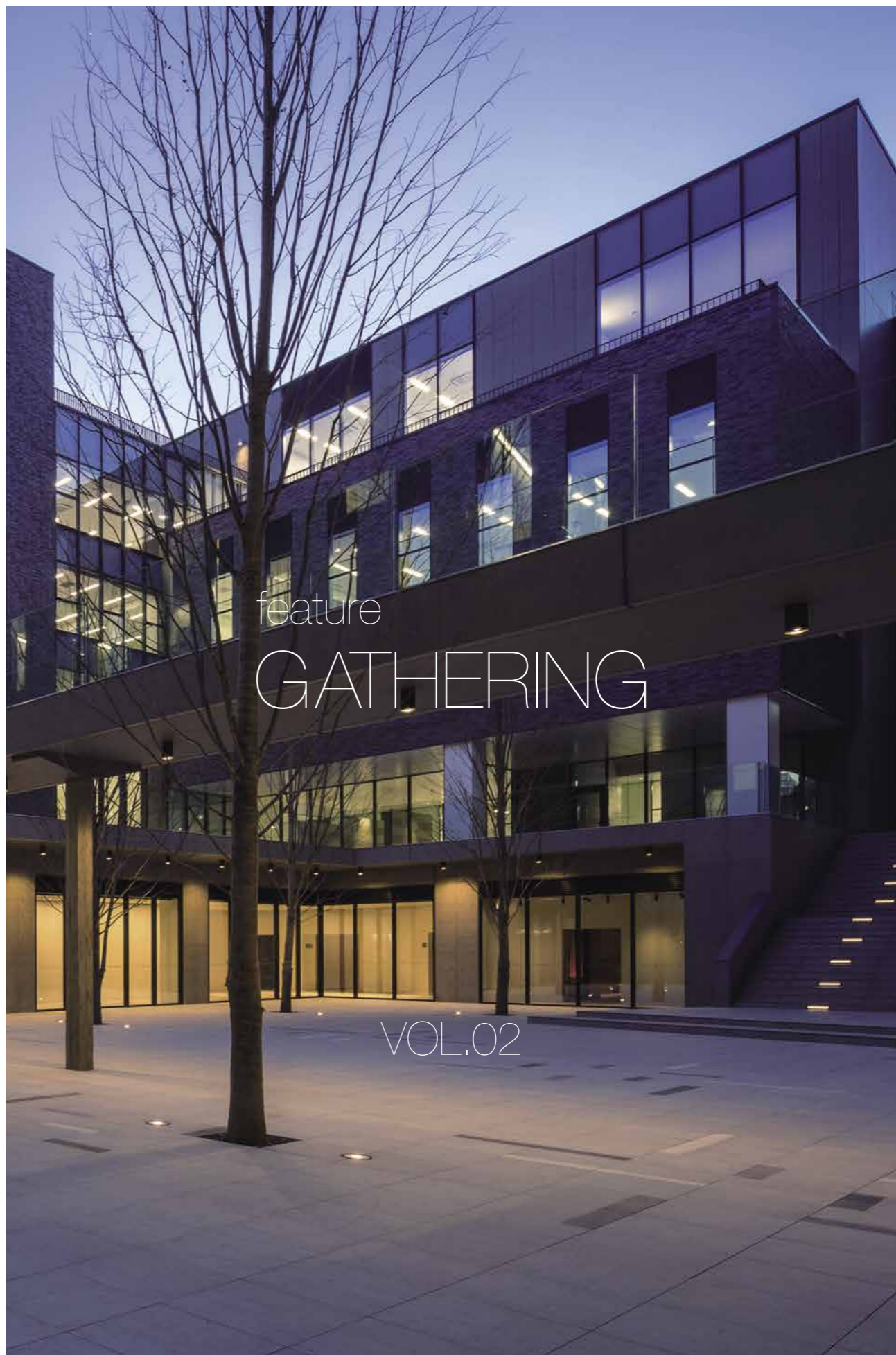
GATHERING



ARCHITORIUM
OBAYASHI DESIGN PROJECTS

— ARCHITECTURE - 建築作品
それを創り出すHITO - 設計者
その情報が集う場となるATRIUM - アトリウム

— ARCHITORIUMは
大林組設計部の建築作品と設計者を紹介します



feature
GATHERING

VOL.02

GATHERING



人が集まる場所がある。その場所は人を惹きつける雰囲気をもっている。華やかな色があったり、ちょっとした憩いのスペースがあったりして、賑やかな雰囲気や、まったりできる雰囲気をつくっている。人が集まる場所というのは、時にはフォーマル。そして時にはカジュアルな形になっている。文化やライフスタイルの異なる海外の街にも、形態や過ごし方は様々であるが人が集う心地よい空間がある。また、操縦機器や実験機器がところ狭しと配置されている宇宙ステーションでも人が集まるスペースが必要で、そういう場所が確保されていると聞く。

われわれが建築を創ろうとするとき、その建築が自然に人を集め、そして会話を生み、そこで貴重なひと時を過ごすことができる場所となつてほしいと考える。建築を創ることは、言い換えれば人が集う場を考えることだとも言える。学校や病院など閉鎖型社会になりがちな環境では、あえて外に開かれた場所が必要になることがある一方、ひとりきりになれる居場所も必要になることがある。そのような対極的な場が互いに影響しあって、より一層場の誘引力が生じたりする。

自然に人々が集い、また訪れたいと思える建築を目指し、国内・海外にとどまらず新しいフィールドにおいても挑戦し続けていきたい。

WEB ARCHITORIUM



MAGAZINE CONTENTS

06	Link+	／	対談：宇宙飛行士 山崎直子
12	GATHERING WITHIN		音楽と夢を奏でる学びの場
20	GATHERING ACROSS		路地空間が世界をつなぐ
26	GATHERING UP		時と場を分かち合うリビング
32	ARC	／	ときを創る
36	WORKS		漢字の歴史と文化を紡ぐ建築
40	WORKS		エクサバイト時代の情報をデザインする
44	HITO	／	グローバルに挑む大林組設計部

<http://www.obayashi.co.jp/design/>

Link+

究極空間でつながるヒト・モノ・コト

山崎直子（宇宙飛行士）×大林組設計部

宇宙エレベーター建設構想^{*1}や宇宙ビジネスアイデアコンテスト「S-Booster」^{*2}がご縁で生まれた、宇宙飛行士・山崎直子さんとの出会いをきっかけに、対談が実現しました。11年に及ぶ地上訓練を乗り越え、日本人2人目の女性宇宙飛行士として宇宙に飛び立った山崎さんに、宇宙という究極の^o場。と、そこでつながった^o人。のドラマを伺います。そして、私たち大林組設計部が目指す新しい空間づくり、チームワークづくりのヒントを探ります。



Link+

Link+



NAOKO YAMAZAKI / 山崎直子 (宇宙飛行士)

1970年千葉県松戸市生まれ。東京大学工学部航空学科卒業。同大学院航空宇宙工学専攻修士課程終了後、1996年から2011年までNASDA(2003年JAXAに改組)に勤務。1999年、宇宙飛行士候補者に選ばれ、2001年に宇宙飛行士として認定。2010年4月、スペースシャトル「ディスカバリー」に搭乗、宇宙へ。ISS(国際宇宙ステーション)に10日間滞在した。

いつかの夢を託した宇宙ホテル、

嶋原 悟 (以下:嶋原) 宇宙への挑戦をきっかけに生まれた今回のご縁の中で、山崎さんが東京大学で宇宙工学を学ばれていた当時、卒業設計として描かれた「宇宙ホテル(SPACE HOTEL)」の設計図を拝見させて頂き、私たちはその図面から感じられる「想い」に強い衝撃を受けました。手書きの図面の美しさだけでなく、ディテールについても緻密に考えられていますよね。私たちは建物の設計を行う際には建築・構造・設備といった分野ごとに専門の設計者が担当し、共創しながらプロジェクトを進めますが、山崎さんはこの図面を構造設計や環境設計もすべてひとりで作成されたことに驚きました。

山崎直子 (以下:山崎) 今となっては拙い手書きの図面ですが、それまで学んだこと、いつか宇宙に行くんだという想いを込めて描いたのを覚えています。

梅野麻希子 (以下:梅野) 大学院を卒業したのが1996年、そして2010年に、幼い頃からの憧れはついに現実となりました。長く厳しい訓練を経て宇宙へと旅立った、その情熱に敬意をこめて、山崎さんが描いた卒業設計のCGを、私たちが作成してみました。

山崎 これは凄いですね! 今はまだ宇宙ホテルの建設には至っていませんが、いずれこういう施設ができれば、もっと宇宙は身近な空間になるでしょう。現在、宇宙開発最大のネックは資材の輸送費なんですけど、その問題については大林組さんの宇宙エレベーター構想が実現したらかなり軽減すると思います。

藤井 梢 (以下:藤井) 宇宙エレベーター構想^{*1}やS-Booster^{*2}、そして私たちが地上で手がける建築に関しても、宇宙という究極空間を知る山崎さんの経験は、大林組設計部が目指す新しいカタチの大きなヒントになると期待しています。



CG化した山崎さん卒業制作「宇宙ホテル(SPACE HOTEL)」

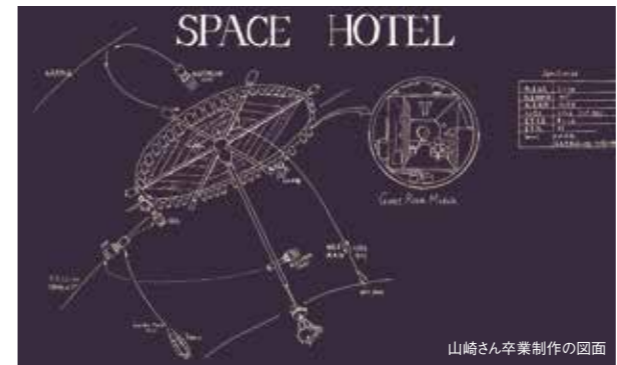
多くの出会いと経験に支えられた訓練の日々

嶋原 山崎さんは幼い頃からSFアニメやプラネタリウムを見て、いつか宇宙へという夢を抱かされていたと伺っています。そこから宇宙飛行士候補になってからも、厳しい訓練が続いたそうですが、その情熱の原動力とは、一体なんなのでしょう?

山崎 確かに11年という、長く感じられますね。宇宙へ行けるという保証はないですし、その間にあった膨大な学習や訓練は、客観的に見れば確かに厳しいものなのかもしれません。でも実は、不思議と苦には感じていませんでした。候補生本人はもちろん、私たちを支える家族や各国のスタッフたちとの交流の中で、訓練の日々自体が楽しいと思えたことが、心を支えてくれたのだと思います。

梅野 でも、実際に行われたという訓練のハードさは凄まじいものだったのではないのでしょうか。音速飛行や、10日もの間外部との接触を一切禁止する野外リーダーシップキャンプなど、過酷な環境が想像できますが、身体的にも精神的にも、どうしたらそこまで強くなれるのかと感嘆するばかりです。

山崎 音速飛行はT-38ジェット練習機の操縦訓練のことですね。T-38の時は、事前に遺書も書かされて……。ああ宇宙に挑むというのは本当に命がけなんだ、この訓練もまた命をかけた真剣勝負なんだと、気持ちが引き締められました。野外リーダーシップキャンプはNOLS(National Outdoor Leadership School)というのですが、これも後々、実際のチームを組んだときにその成果がはっきり分かりました。訓練中は毎日違う人がリーダーになり、他の全員がそのフォローをする。うまくいく日、そうでない日は、一体なにが違うのか。問題に直面したとき、チームとしてどう解決するのか。毎日新鮮な気づきがありました。



山崎さん卒業制作の図面

クリスタの想いを受け継いだ大先輩との出会い、

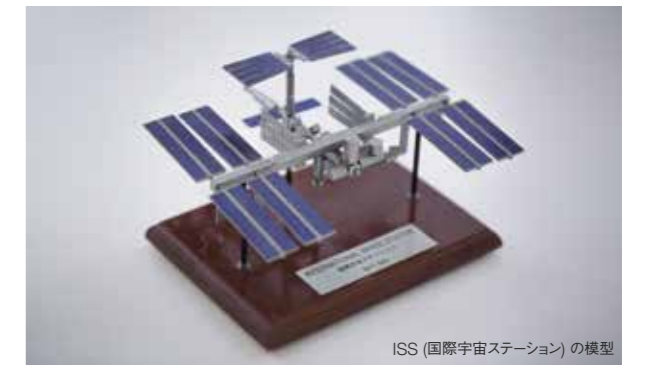
藤井 訓練中は多くの人に支えられたとおっしゃっていましたが、中でも特に印象に残っている出会いのエピソードはありますか?

山崎 候補者の中には、私より長い訓練を積んでいる方がたくさんいました。中でも勇気もらったのが、NASAでの訓練中に知り合ったバーバラ・モーガン(以下:バーバラ)です。彼女はアメリカの小学校教師から宇宙飛行士候補生になった人物で、1986年、あのチャレンジャー号の爆発事故で犠牲になった女性宇宙飛行士のシャロン・クリスタ・コリガン・マコーリフ(以下:クリスタ)のバックアップを務めていました。ふたりは長年共に訓練を積み、最終的にクリスタが選ばれました。中学生だった私が、テレビの中で呆然と見つめたあの悲劇の瞬間を、バーバラは実際にフロリダの打上げ場でチャレンジャー号の爆発を見上げていたんです。

梅野 それでもなお、宇宙を目指して……。確か山崎さんも、あの事故を見て、クリスタの想いを私がかねるんだと決意したと語っておられましたね。

山崎 進路に迷った時には、あのチャレンジャー号事故のことが思い出されて。クリスタの遺志を受け継いだふたりが、遠い未来で出会って共に訓練に臨んだということに、なにか運命のようなものを感じました。バーバラは私より19歳年上で、よく「おばさんにとっては大変よ」と言っていました。常に前向きに訓練を続けていました。彼女が宇宙へ飛び立ったのは、あの事故から21年も後の、2007年のことでした。

嶋原 その3年後、山崎さんもまたクリスタの遺志を受け継いで宇宙へと旅立つことになったわけですね。



ISS(国際宇宙ステーション)の模型

Link+

上下のない宇宙 それでも人は`場、を求める

嶋原 宇宙では、どんな出会いや経験がありましたか？ ISS(国際宇宙ステーション)という限られた空間で、どんな生活を送られたのかとても興味があります。

山崎 先ほど`宇宙エレベーターが完成したら輸送費負担が大幅に軽減できる、というお話をしましたが、宇宙空間に1kgの物体を運ぶコストは、現状100万円くらいかかるんです。1000円/1gくらいですから、金よりは安いけれど銀よりははるかに高額になってしまいます。でも、そんなコストをかけてまで、ISSに運ばれた大きな物体があるんです。なんだか分かりますか？

藤井 コストをかけてまで地球から宇宙へと運ぶ必要があるものなのですか？

山崎 実は、テーブルなんです。メンバーがミーティングや食事する時に囲むテーブルとして重宝されていました。

梅野 でも、宇宙空間では上下左右もないし、飲み物だって宙に浮かべておけますよね。それなのに、あえてテーブルが必要だったのでしょうか？

山崎 スペースシャトルではテーブルはないですから、なくても大丈夫なんです。でも不思議なことに、そのテーブルがあることで、テーブルを囲み、広くて人が散り散りになりがちなISS内でも、自然とコミュニケーションが生まれていました。

嶋原 テーブルの存在によって、その空間にみんなが集う`場、が生まれ、集うことにより、仲間の交流が活性化したわけですね。

山崎 そうなんです。雑談したり、ゲームをしたり、各国の宇宙食を交換し合ったり(笑)。ミッションとはまた別の親しい交流がそこで生まれました。他にも`場、が本当に大事ななん

だなと感じたのは、国籍に関係なく、くつろぐ場所が自然と決まっていたことです。ISSは国際パートナーの各国がそれぞれに開発したパーツからできていて、宇宙飛行士が活動する場となる各モジュール空間も、担当各国が分担して開発します。日本が加わる西側諸国の実験モジュールは、内部のインテリアを出来るだけ共通化していて、あくまで機能性重視で、非常にシンプルでした。内装も全体的に、白っぽくてツルツルしています。ところがロシアのモジュールは、壁面が深いグリーンや茶色のカーペット生地で覆われているんです。また、ノードと呼ばれるモジュールの接続部分の壁は独特な色彩で、サーモンピンク色でしたね。

梅野 ロシアの古い邸宅にある色使いですね。科学の最先端をいくISSの中で、そのような各国のこだわりがあるとは驚きです。心理的な効果を狙ったのでしょうか。

山崎 はじめはみんな、サーモンピンクに違和感を覚えます。でもしばらくすると、無機質な色調ばかりのISSの中で、唯一ぬくもりを感じられる場所として、なんとも居心地がよくなっていきます。結局、夕食時になるとみんながそこに集まって、くつろぎのひとつを過ごしていました。なるほど、こういう効果があるのだと感心しました。また、ロシアのモジュールの壁のカーペット生地は、マジックテープをつけた道具をどこにでもくっつけておけると、実は機能性に関しても考慮されていましたね。

梅野 一枚のテーブルや、空間の色調、壁の材質などが、コミュニケーションを誘発しているのですね。場所や空間を通じて、人に働きかけようとしている、私たちの設計という仕事には、とても刺激になるエピソードです。環境心理学的な側面から、建築の世界でも研究されている「アフーダンス」という概念があるのですが、それに通じるお話ではないかと思います。



対談の様子



※1「宇宙エレベーター建設構想」

Link+

ワッペンにこめられたチームの団結力

嶋原 `場、の重要性について伺ったところで、もうひとつ教えていただきたいのが`人、そして`組織、についてです。各国から選抜されたスペシャリストたちは、どのようにコミュニケーションを取り、ひとつのチームとなっていったのでしょうか？

山崎 私が共にISSに向かうチームは7名で編成されていて、私以外は全員アメリカ人で、そのうち4名はすでに打ち上げを経験したことのあるベテランばかりでした。もちろん、ずっとNASAで共に訓練してきたメンバーなので馴染みはあります。でも、これから互いに命と誇りをかけて、宇宙へと臨むことになる。その覚悟とチームワークを固めるためにチーム結成後、最初に行う共同作業は「チームワッペン作り」でした。青いユニフォームの胸につけるチームの証として、ミッションを象徴する図案とメンバーの名前を、6色の刺繍糸で表現できるようにデザインするのです。図案と5色の刺繍色が決まった時、チームメンバーから「赤い糸は、ナオコの日の丸のために」と言葉を頂き、赤い糸を採用してくれました。みんなの笑顔によって、ただ一人の日本人、そして数少ない宇宙初体験の新人、そんな緊張感がほぐれ、本当にチームの一員になったと感じた瞬間でした。

リーダーシップとフォロワーシップ

梅野 船長のアレン・ポインデクスター(以下:ポインデクスター船長)は、多彩な個性とスキルの持ち主が集まるチームを、どのように舵取りされていたのでしょうか？

山崎 リーダーに選ばれるくらいですから当然ですが、彼はチームの誰よりも経験・知識、

そして体力を備えた宇宙飛行士です。でも、厳しい訓練の中ではあえて真っ先に「疲れたから休まないかい?」と言ってくれる人でした。他のメンバーが切り出しにくいことも、自らが率先して申し出ることで言いやすい雰囲気を作ってくれた。本当に、魅力的な人物です。

藤井 ハード面だけでなく、ソフト面の環境も整えてくれる人だったわけですね。

山崎 そうです。おかげでチーム内で意見が割れた時などでも、活発な意見交換ができました。トップダウンではなく、みんなの意見を聞き、メリット・デメリットを全員が正しく共有して、納得を得たうえでチームの最終決断とするという姿勢は、決してぶれませんでしたね。だからこそ、みんなが彼を敬愛していたのだと思います。

梅野 ポインデクスター船長のおおらかさが、風通しがよいチームをつくっていたこと、だからこそ優れたメンバーが信頼感で結ばれて、大きなミッションを達成できたことが、よく分かります。私たちも各部署・専門家が連携してプロジェクトに挑む者として、共通する部分が多いと感じます。

山崎 宇宙であっても地上であっても、大きな目標を成し遂げるためには、個々人がプロフェッショナルであることはもちろんのこと、人と人との出会いや、メンバー同士の強いつながりが本当に大事なのだと思います。

嶋原 大林組の使命は、人が出会い、つながる場所をつくることでもあります。山崎さんのご縁をきっかけに、また新たな可能性が広がり、実現に向けて動き出すことを期待しています。本日は大変興味深いお話をお聞かせ頂き、ありがとうございました。



※2「S-Booster 2017」

※1「宇宙エレベーター建設構想」
大林組プロジェクトチームが2050年完成を想定し、具体的な構想をまとめた。長さ10万kmに及ぶカーボンナノチューブ製のケーブルで地球と宇宙を結び、エレベーターを運行させる。ロケットに代わる経済的輸送手段となり、人や物資を大量に宇宙へ搬送する。地球の重力と遠心力の釣り合う、地球上空3.6万km付近にターミナルを設置し、宇宙太陽光発電、宇宙資源探査、宇宙観光旅行など様々な可能性を探る。

※2「S-Booster 2017」
宇宙関連ビジネスのアイデアを広く募るコンテスト。内閣府、JAXA、および大林組を含む複数企業による実行委員会により開催。2017年10月に最終選考が行われ、山崎直子さんも審査等に参画。

P.7写真解説) 地球上からISSを目視できる: 梅野麻希子(大林組)、山崎直子(宇宙飛行士)、嶋原悟(大林組)、藤井梢(同左)

GATHERING WITHIN

音楽と夢を奏でる学びの場

PROJECT 武蔵野音楽大学江古田キャンパス

音楽を奏でる人やそれを立ち止まり聴き入る人、友人と語り合う人やひとり読書をする人、そんな思い思いに人々が集まるヨーロッパの街をイメージした賑わいのある広場がここにある。この広場は敷地の中央に設けられ、学生達が自然と集まる中庭形式のキャンパスとなっている。広場に集まる未来の音楽家たちがともに語りあい、そして響きあい、広場を取り囲む建物とともに、オーケストラのような風景をつくりあげている。これは音楽と夢を奏でる大学の物語である。



設計者：小川 朗, 小山 岳登, 根本 智子, 鈴木 貴博, 小林 靖樹



住宅地に生まれた中庭広場

キャンパスは、閑静な住宅地の中で大きな音を外部に出せず、高さの制約も非常に厳しい立地となっている。このような制約の中で、音楽大学という複合的な施設を建てることは容易なことではなかった。

そこで考えたのが、建物を敷地周囲に配置し、半地下に広場をつくるというアイデアである。外部に対して閉じることで周辺環境への影響を最小限におさえつつも、開放的なキャンパスとすることに成功した。キャンパスの中心に配置した半地下の中庭広場により、地下1階まで十分に光を取り入れることができ、豊かなキャンパスの環境をつくり出すことへつながった。

中庭広場を囲む建物は、教室、図書館、レッスン・練習室など機能ごとに独立している。これらの特徴的な個々の要素は中庭広場によって調和が図られ、キャンパス全体がひとつの街のような景観となっている。



キャンパス全体がコンサートホール

中庭広場に立つと、様々なジャンルの音楽がどこからともなく聴こえてくる。中庭広場を囲む建物群は敷地周辺からの音を遮断しつつ、周辺へ音が漏れることを防いでいる。これにより広場には心地よい音楽だけが響き渡る。それぞれの建物から音と人が広場へと自然に集まり、ひとつの音楽の街を形成している。また、各建物からは、ガラス越しに中庭広場を見渡することができる。中庭広場がステージ、周りの建物が客席、そして、キャンパス全体がコンサートホールのようなのである。





人と音楽が集う夢の舞台へ

中庭広場や教室で練習を重ね、各所から溢れてくる音に刺激され、音楽論について語り合う。そんな学生たちが向かうのは、1960年に日本で初めてクラシック専用につくられたコンサートホールのベートーヴェンホールと、最新の音響技術を駆使したブラームスホールである。

歴史あるベートーヴェンホールは、広場と繋がり人が集うホワイエ空間を中心にリニューアル。さらに、新キャンパスのもうひとつの顔となるブラームスホールを新設した。壁面の広がりや天井高さの工夫から、演奏者と聴衆のドラマティックな一体感を生み出している。残響時間と同時に、初期反射音、ステージから客席に直接届く直達音、その後を追って壁・天井から跳ね返ってくる二次・三次反射音は、重要な音響要素である。それらがすべての客席で豊かに響くように最適な音響デザインとなっている。デジタルでは伝えられないアコースティックの良さを感じる空間である。

キャンパスは、実践的な音楽教育の学びの場であると同時に、将来の音楽家たちが夢を叶える、きらびやかに輝く憧れの舞台なのである。

GATHERING ACROSS

路地空間が世界をつなぐ

PROJECT JOSAI I-HOUSE 東金グローバル・ヴィレッジ

文化や風習が異なり、誰も知る人のいない海外で留学生生活を始めようとする時、分からない事も多く不安な気持ちになったりする。そんな時は、急ぎ足ですれ違う人には声を掛けづらいが、のんびり佇んでいる人には声を掛けやすいものだ。留学生にとっての住居は、物理的・精神的に守られる安堵の場であってほしい。その上で更に、風土に慣れない者同士が寄り集まり、のんびり佇み話し合えるコモンスペースがあれば、より居心地の良い住まいとなる。

JOSAI I-HOUSE 東金グローバル・ヴィレッジは世界各国から集まる大学生たちのための寮である。下町の路地のような安堵感があり、井戸端会議のようにかしまらずにコミュニケーションできる。小さなきっかけから交流が生まれ、やがて確かな絆をつくり出すことのできる場所を目指したものである。

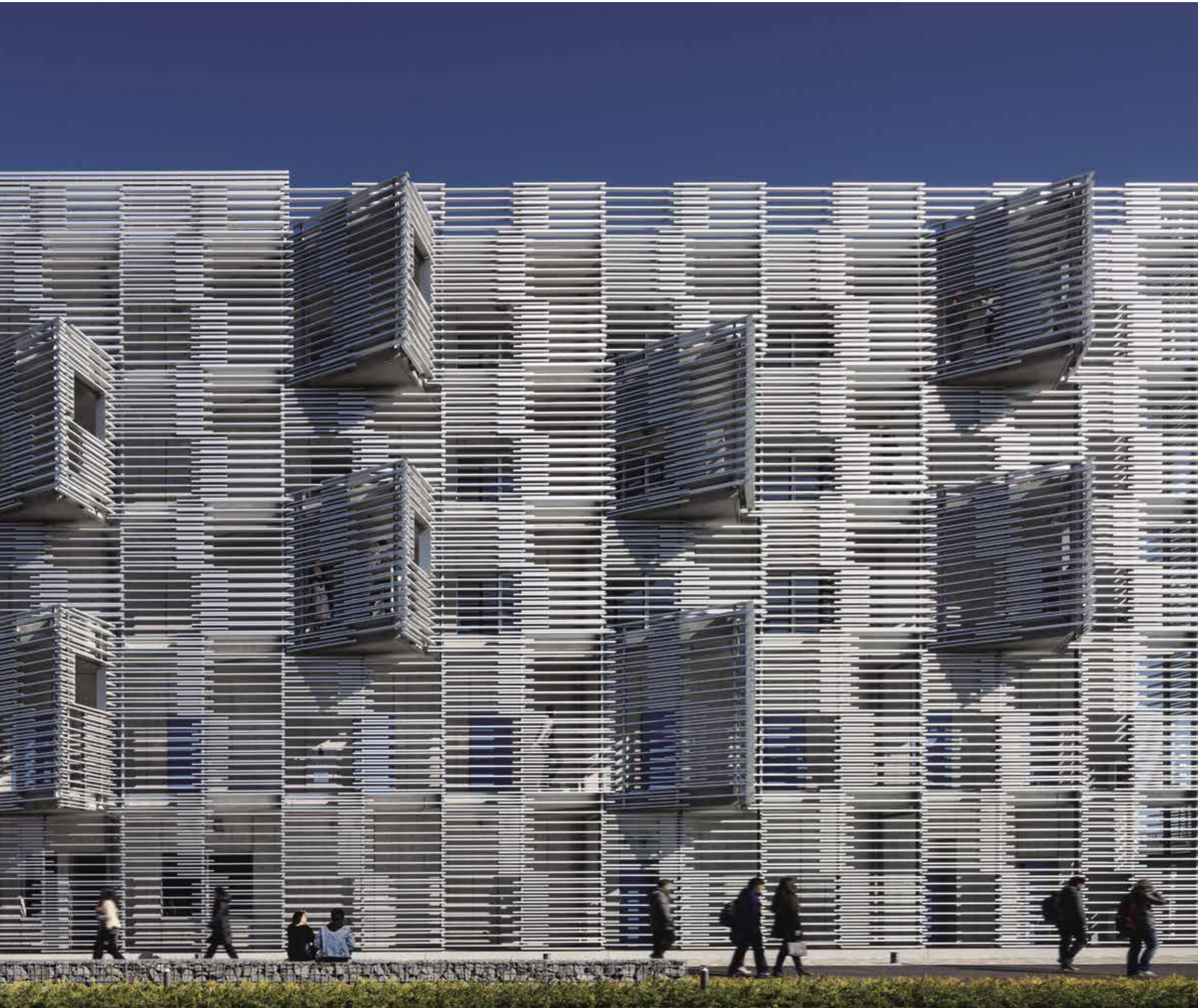




小さなしかけが変化を生む

この留学生寮の最大の特徴は、ルーバーの内側に平行して並ぶ二本の廊下である。外廊下では、三角形の空間が外に向かってランダムに張り出しており、内廊下には、個室の入口が並ぶ。外廊下と内廊下の間は透明の引き戸があり、自由に行き来ができる。外廊下では、通過するだけでなく、三角形の空間により、学生同士がすれ違いざまにちょっとしたおしゃべりをする余地を設けた。一方、内廊下は、部屋から出てゆっくりと話ができる、細長い路地のような溜まりの空間を想定した。ルーバーを通して外の風や光を感じる半屋外の外廊下から、一步奥に入った内廊下を経て、更に寮室へと、徐々に動きのスピードを落としていくような、三段階の空間構成となっている。人の流れに変化を生みだし、交流を活性化することを旨とした。

設計者：大西 宏治、森 篤子、武井 俊道



上下階の交流を促す縁側空間

ランダムに張り出した溜まりスペースをずらして配置することで、上下階の交流を促すように意図されている。各階にある空間的なしきりかきはさやかな交流を生み、小さな日常の交流を積み重ねることで全体が活性化されることを目指している。また、互いに交流する姿がルーバー越しに建物の外に滲み出すことで、建物のコンセプトが視覚化されることも意図した。

外部と内部を緩やかにつなぐ半屋外的な空間は、縁側や路地を想起させる日本らしい空間でもある。世界各国から学生が集まる国際大学として、留学生には日常の空間体験によって日本文化を感じてもらいたいという狙いもあった。この留学生寮が学生たちの何気ない一瞬一瞬の交流を輝かせ、一生の思い出をつくりだす大切な場所となることを望んでいる。

GATHERING UP

時と場を分かち合うリビング

PROJECT 大正大学15号館 地域構想研究所

ひとつのテーブルを囲み食事を共にすることは、共同生活の第一歩であると思う。

寝食を共にすることは大切な時間を共有することに他ならないからだ。

大正大学15号館 地域構想研究所は地方に住んでいた若者が、地方創生に貢献できる未来のリーダーを目指し、大学生活の始まりと同時に一つ屋根の下に集まって共同生活を送るための学生寮である。

個人のプライベートを重視するワンルーム形式とするのではなく、リビング、ダイニングや水廻りを共有するシェアハウス形式とすることで、学生同士が時間を共有し、絆が深まることを意図した。この場所で育まれた学生同士の連帯感や仲間意識が、各地方の創生に活かされることを期待している。





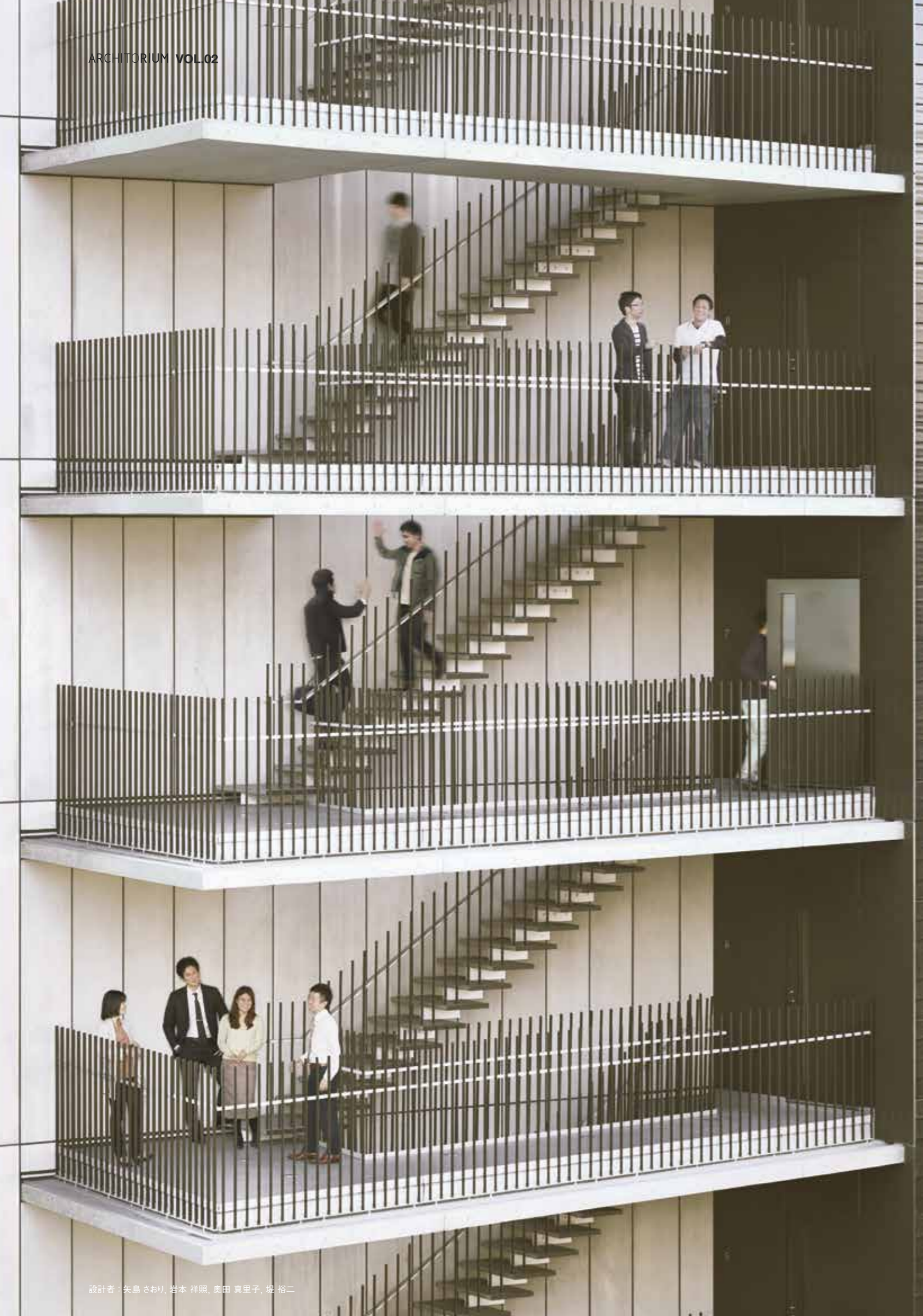
居心地の良さが絆を深める

1つのフロアは、中央に配置されたLDKとそれを取り囲む8人分の寝室となっている。学生たちはくつろぎ、食事をし、調理をするLDKを共有する。即ち、共同生活を通じて主体性や協調性を養える実践の場となる。多くの時間を共に過ごすことで、学生同士が密な関係を築ける空間となることを意図している。

生活の中心の場は、共にくつろぎ集うために、長居したくなるような居心地の良さが必要である。狭すぎず広すぎないスペースに正方形のテーブルと8人分の椅子を配置。心地よい距離感で会話や食事が楽しめるよう配慮を行った。

リビングと各寝室の間には一間の奥行きがあるプライベート棚を設けた。各個人用の棚によるバッファゾーンを介して、パブリックとプライベートを緩やかにつなげている。個人の棚に置かれた私物が自然に視野に入ってくることから、棚そのものが個性の表現の場となっている。





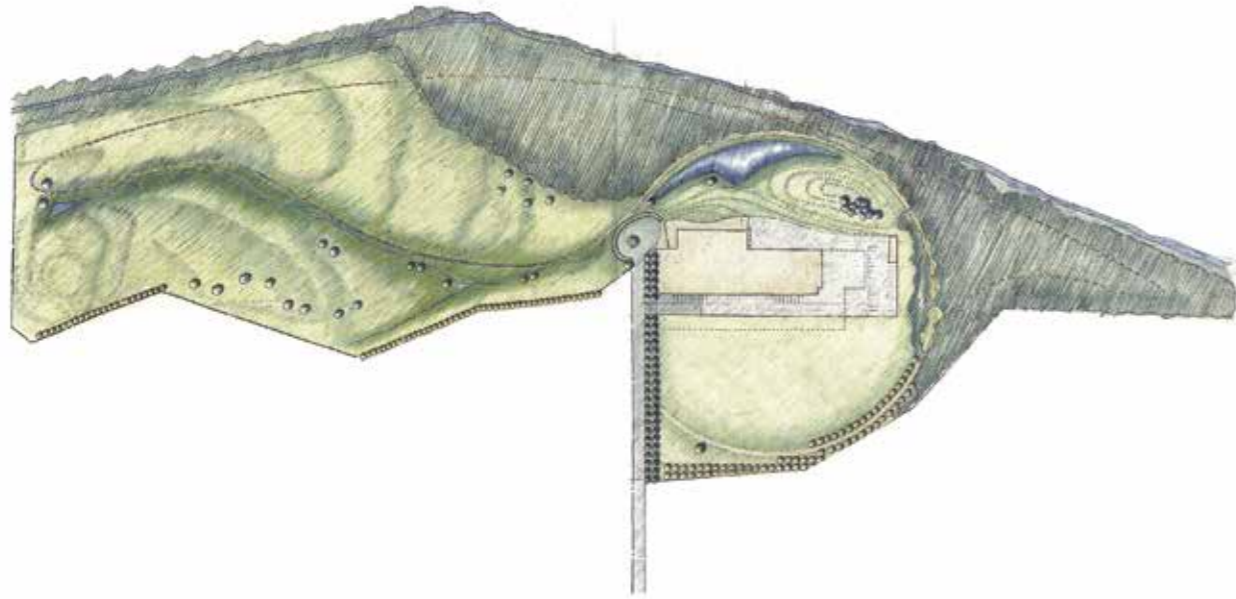
人の繋がりが地域の繋がりに

各フロアの主動線は外部の階段となっている。上下階を移動する単純な動線としての機能しか持たないミニマムな階段ではなく、街並みを見下ろしながら滞在できる時間を生むよう、空間に余裕を持たせている。移動する学生同士は、ただすれ違うだけではなく、偶然の出会いから立ち止まって気軽に立ち話ができるようになっている。この階段により、5フロア積層した学生寮は1フロア8人で完結するのではなくフロアを越えて40人のつながりとなる。また、より静かで快適な環境とするため、道路側に窓を設けず力強い壁面とスラブの外観とした。

また、低層部分には地域構想を研究する場として、研究ラウンジが配置されている。階段は「地方創生に貢献できる未来のリーダーを育成する場」としての学生寮と「地域への課題に積極的に取り組み、地域連携のプラットフォームとなる研究の場」としての研究ラウンジをつなぐ役割も果たす。

各地方から集まる学生のための寮と、地域構想を研究する場が一体となって相乗効果を生み出すこの場所が、幸せな人のつながり、地域のつながりを生み出し、地方創生へ貢献していくリーダーを生み出すことを期待している。

ARC TIME



ときを創る

北の厳しい大地の中で感じる川の流れ、空気の変化、草花の芽吹き。

20年の時を越え、「六花の森」は次の季節をじっと待つかのように静かに佇む。

「六花の森」は、北海道中札内村の広大な敷地に計画された、お菓子工場、美術館群を取り囲むようにせせらぎ、湿地、河畔林を再生したランドスケーププロジェクトである。北海道を代表する企業であるクライアントの「建物・施設は、自分たちのものではなく、後世に残す社会資本である」との想いを軸に、地域に根差し、新たな文化、新たな風景を生み出すべく1997年より計画を進め、調査開始から

約10年の歳月を掛けて、2007年に、約10haもの広大な森「六花の森」が完成した。その後も各種生物調査などを実施し、完成後、10年を迎えている。

クライアントの未来を見据えた想いを、設計者が汲み取り、この場所にしかない豊かな風景をつくり上げた。一時の風景は、時をかけてはぐまれた風景。すべての想いは「今に」、今ある想いは「未来」に引き継がれ、想いを馳せる気持ちが、この北の大地の空気を醸成させていく。我々は、モノづくりを通じ、ときを創っていった。

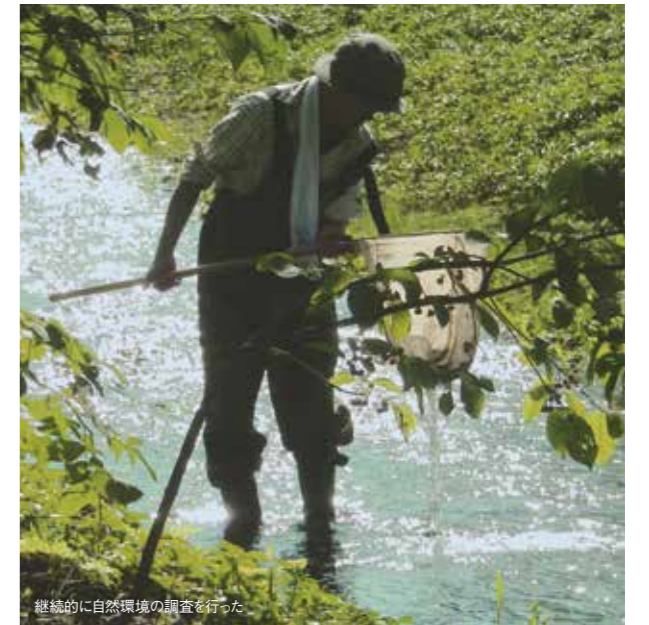
ランドスケープデザイン：岩井 洋



設計者は、この場所にしかない風景を生み出すべく、何度も現地を訪れ、自ら荒地や雪原に入り込み、周辺の植生や地形の歴史に至るまで徹底的に調べ上げた。敷地周辺を含めた自然環境の入念な調査、地形図の分析をもとに、敷地内の河道跡、伏流水といった環境資源や河岸段丘の特徴を抽出した。抽出されたこの土地固有の要素と微地形を手がかりとして、せせらぎや湿地を再生し、陸域から水域までの多様な植生を可能にする新たな地形をつくり出したのである。



何度も現地を訪れるにつれ、大地の小さな声を聞きとれるようになるがごとく生まれるべき大地の形を見極める。河道跡に堆積していたレキを掘り、緩やかな傾斜をつけたことで水が流れはじめ、時の流れとともに緑豊かな植物が群生し、豊かな生態系が再生し、多様な環境が新たに生み出された。せせらぎの再生により乾燥化による植生の変化が抑えられ、地域固有種の植生を保つとともに、水辺や湿地の特徴を表す水生植物やカエルやトンボといった生物など、この場所本来の動植物が戻り、多様な環境が生み出されたのである。



継続的に自然環境の調査を行った



ランドスケープのスタディ模型

多種多様な条件下、強い想いによってせせらぎを再生することで生まれたこの環境が、時を経て後世に想いをつなぎ、時間をかけて風景を醸成している。設計者の継続的な粘り強い意志により、時を経てもなお、また時をかけることにより、一層美しく、人々の心に訴えかける風景を生み出している。



WORKS

Tradition to the future

漢字の歴史と文化を紡ぐ建築

漢検 漢字博物館・図書館

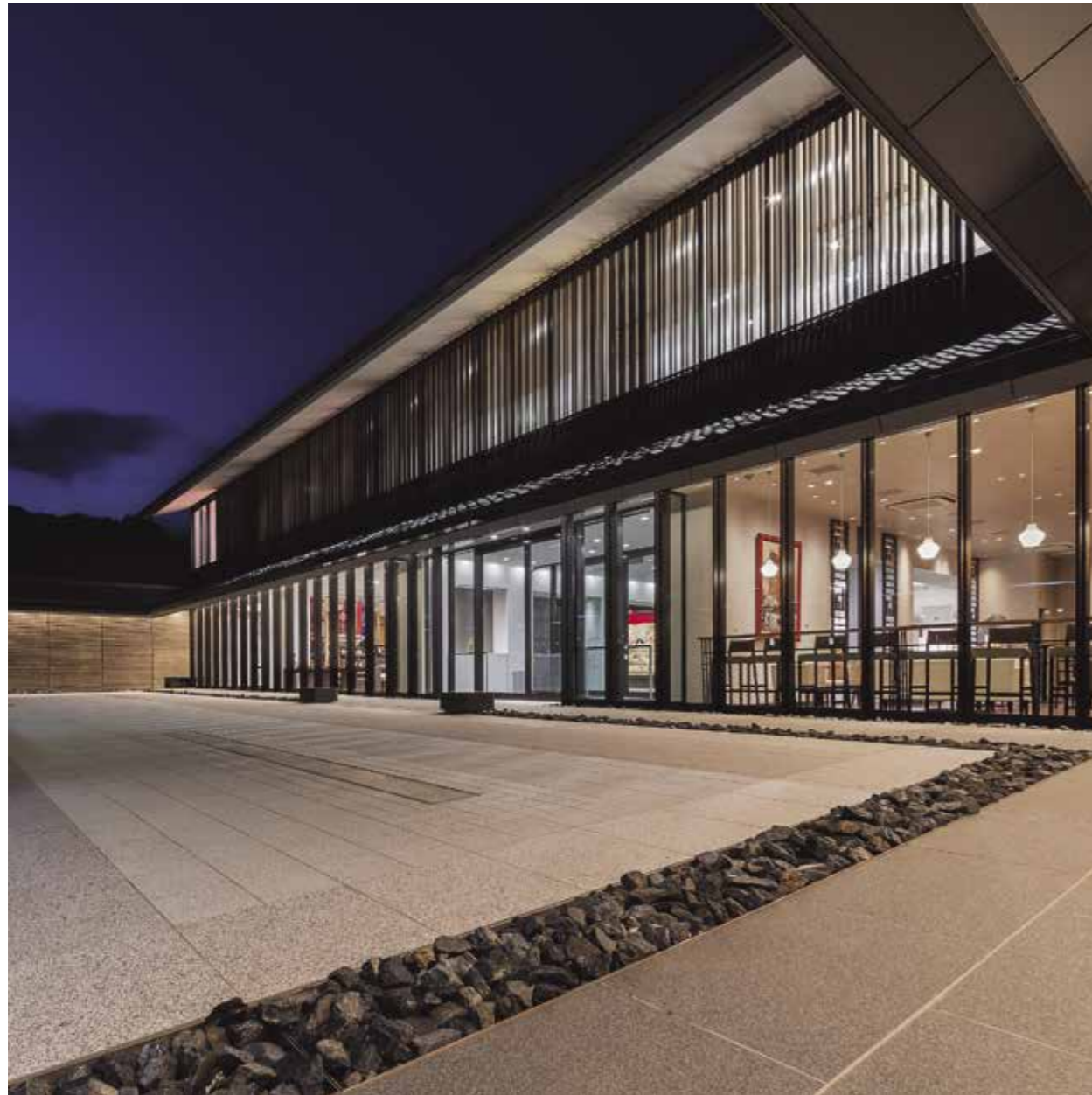
「公益財団法人 日本漢字能力検定協会(漢検)」による漢字を展示主体とした日本初となる体験型の博物館・図書館の計画である。体験型展示による驚きや発見を通じて、漢字という日本文化を楽しむことができる。

平成23年に閉校した京都市弥栄中学校跡地を計画地とし、近隣住民や旧校卒業生だけでなく、新たに訪れた人々にもこの地が長年かけて熟成した「学び」の心を継承してほしいという思いを込めた。

京都祇園の賑わいのある四条通りに面した外観の色彩計画には、漢字の筆書きからイメージされる墨色を採用した。古来より用いられる墨色の濃淡により、瓦屋根から前庭までデザインの統一感を作り出している。

2階の外装には縦格子のルーバーを設け、京都の町屋に見られる京格子を表現。瓦屋根や縦格子が京都の街並みに調和し、それぞれの小さな材料が規則正しく整列することにより緊張感のある美しい外観を目指した。





漢字の細部に宿る美しさを表現

漢字の終筆(とめ・はね・はらい)に宿る美しさを庇や軒先など建築のディテールに取り込んだ。前庭に深く突き出した庇が広い軒下空間を作り出し、来館者を包み込むように歓迎する。庇の軒先は樋を設けないシンプルで端正なディテールとし、先端から滴り落ちる雨水は石敷きの側溝に流れ込む。側溝に囲まれた前庭にはかつての京都市弥栄中学校の玄関に石段として使われた花崗岩をはめ込み、土地の歴史と融合した空間とした。

吹き抜け空間には5万字的の漢字を並べ、階段から眺めると壁面模様として認識し、壁に近づくと個々の漢字に対して意味を感じ取ることができる。

古来より現代に伝わる漢字に対する新しい発見を、未来につなげるための施設。建築も同様に大陸から伝わった様式が日本独自に発展してきた。普段意識せずに使っている二つの世界。訪れた人たちが「漢字」とともに「建築」についても何かを感じ取ってくれるとうれしい。



設計者：日野 惇, 黒川 宗範, 篠木 大輔, 齋藤 隆治

WORKS

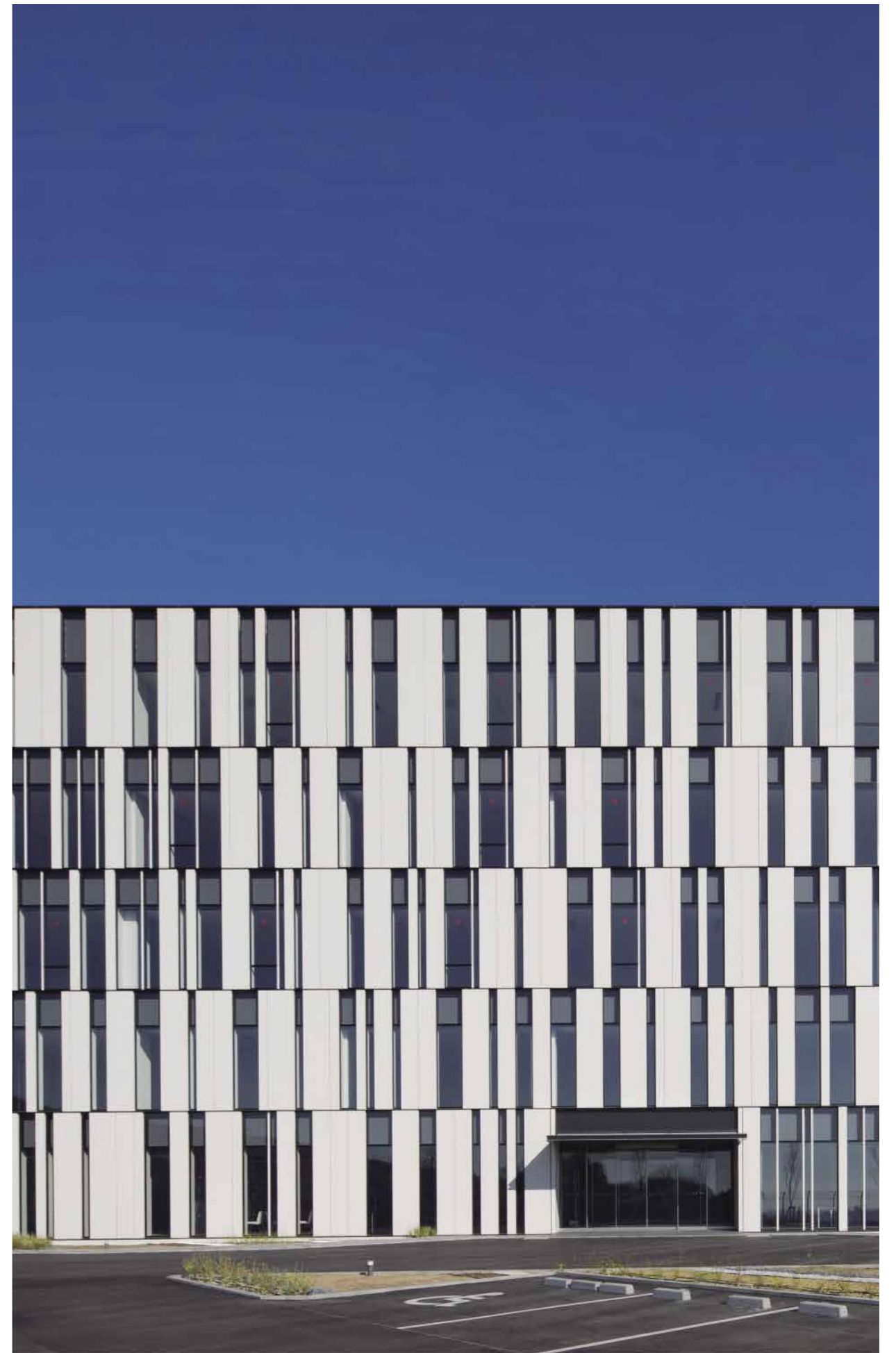
Streamed line of Big Data

エクサバイト時代の情報をデザインする
大阪センター

自然豊かな郊外に建つデータセンターの計画である。外装デザインは細分化された線形のパターンをランダムに集合させたものとし、バーコードのようなデザインによって内包する膨大なデータを想起させる表現とした。小刻みな線形状のランダムさが生むゆらぎは、デジタルと自然との緩やかな融合を図り、建物と景観が調和する事を意図したものである。

このデザインは窓と壁によって構成されているが、これは開口率を適度に抑えるという機能的な意図がある。内部環境に対する熱負荷を低減することで省エネ性を高めると同時に、外部からの視線の遮蔽にも配慮したファサードとなっている。

また、高い信頼性・冗長性を確保するため、ハイブリット免震構造により地震動による横揺れを低減。インフラ・設備機器は災害時に備え、国内最高レベルの性能を有している。





多様性を表出するデザイン

外装・内装部材は規格化を図りながらも一定のパターンを多様な線型で表現することで細分化されたデザインとした。これにより、データセンターが取り扱う膨大な情報の多様性を表現したものである。

この線型によるデザインは、内外装からサイン、ランドスケープに至るまで展開された。外装のリブパターンや内装素材のテクスチャー、目地表現などの細かなディテール、無窓空間の中で位置や情報を示すサイン、空間に落ちる影まで同一モチーフで統一している。

ある法則によって生み出される多様性は、植物や樹木のように自然の法則によって生み出される多様性に通じるものがあると考え、周辺の雄大な自然と融合し、木漏れ日のような柔らかい建築を目指したものである。



設計者：谷部 昌俊、福本 義之、津熊 直人、箕浦 浩樹、泉孝典



HITO

グローバルに挑む大林組設計部

in Singapore

2015年初夏、初めて降り立ったシンガポールの風景を眺めた瞬間、私の胸中で未知なる世界への期待が高まっていくのを感じた。

大林組設計部は近年積極的に海外の設計事務所に職員を送り込んでいる。その理由の一つとして、グローバル企業のクライアントが増え、英語でコミュニケーションが取れる設計者育成が急務となっていることがあげられる。その機会が私にもやってきたのである。当時英語に自信があるわけでもなく海外生活の経験もなかったが、困難にチャレンジすることが自身のレベルアップにつながると信じ、新しい世界に飛び込んだ。

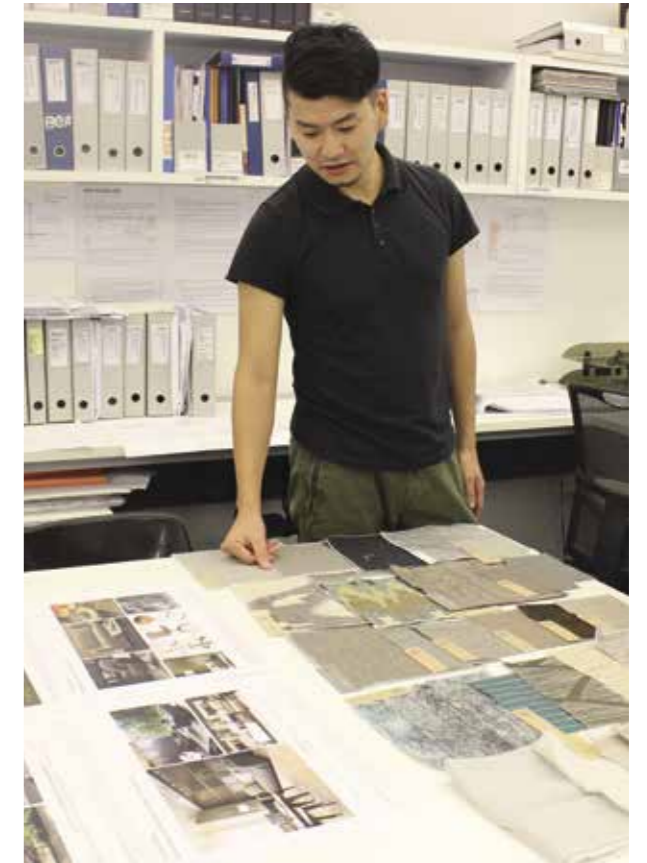
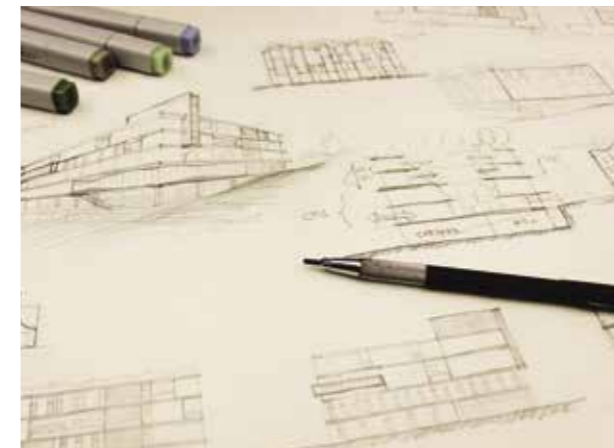
それから2年間、eco-id architectsという設計事務所Senior Architectとして設計に従事した。シンガポールという異国の地で、事務所の仲間と共に仕事に打ち込み、クライアントと議論しながらプロジェクトを推し進める。大林組で培ったものを駆使して世界に挑戦する経験は、自らの世界を広げ、たくさんの気づきを与えてくれた。



2年間の経験の中で最も実感が強かったのが、「設計行為の普遍性」だ。地域性や文化の違いはあれども、そこに介在する設計のロジックや設計解に至るプロセスは同じで、これまで大林組設計部で培ってきたことは、世界のどんな場面でも十分に通用すると認識できた。

一方、グローバルに展開する設計事務所に在籍したことで、設計者の立ち位置の違いを明確に感じた。クライアントが eco-id に強く求めるものは純粋なデザインである。それゆえ彼らはその部分に最も時間をかけ洗練させてゆく。設計ロジックやプロセスは普遍でも、各作業にかかる時間と労力のバランスが異なるのだ。この経験は設計者として非常に貴重なものだった。

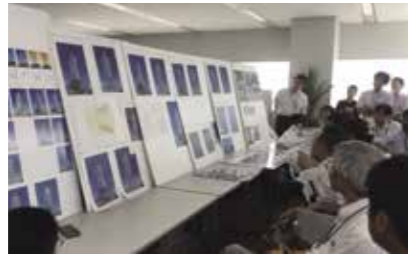
シンガポールでの生活は総じて素晴らしい経験であった。世界各地から集まった同僚たちとの交流は、これまでの人生になかったものであり、コミュニティの輪が広がったことは純粋にうれしかった。人と人のつながりを大切に、より良いものをつくる大林組設計部の精神は、世界のどこにあっても変わらない。シンガポールを離れる時に仲間たちと交わした言葉は、「また世界のどこかで」。グローバルに集える仲間や友人を得て、自分の視野が大きく広がったと同時に、設計者としての強い自覚にめざめ、広い世界で挑戦する覚悟ができた。



株式会社大林組 大阪本店 建築事業部 プロジェクト設計部副課長 中谷真

profile

2007年 京都大学大学院工学研究科卒、大林組入社、本社設計部勤務。
2015年 eco-id architects 出向。2017年 より現職。



MAGAZINE

「ARCHITORIUM」は、大林組設計部の建築作品「ARC」と設計者「HITO」を紹介する情報誌として2017年2月に第1号を創刊しました。第1号は、大林組設計部の「DNA」である「世代を超えて受け継がれる設計の作法や『共創』による『誠実』なものづくり」をテーマにまとめています。また、「HITO」では、大林組設計部の女性たちにクローズアップして紹介しています。

WEBSITE

大林組設計部建築設計プロジェクトのWebサイトです。これまで手がけてきたプロジェクトやニュースを紹介しています。ゼネコン設計部特有の技術を活かしたプロジェクトや様々なビルディングタイプを掲載し、FEATURED、WORKS、NEWSに分類されたコンテンツを写真や動画で分かり易く説明しています。また、情報誌「ARCHITORIUM」も一部掲載している連動企画です。

DESIGN SESSION

計画段階や、竣工時に社内レビューを行い、広く意見交換することで、設計力と品質を高めることを目的としています。また、年に一度「設計部門表彰」を行っています。社内Webへの作品掲載、設計部員全員による投票、担当者による公開プレゼンテーション、現地審査等、表現の機会を重ねることで、伝える力を総合的に高めます。各人はその経験をフィードバックし、次の設計に活かしています。

CENTURY FORUM

「センチュリーフォーラム」では、設計者たちの間で話題の最新情報を広く共有する社内勉強会の一つとして、海外視察、企業留学、海外事務所出向の経験などについて、映像を交えてプレゼンテーションし、議論しています。年に数回実施され、2017年は、シンガポール eco-id architects および ロンドンARUP社への出向報告、韓国のZEB指向建築の視察報告などを行いました。

EDITORIAL NOTE

早いもので年の瀬が迫ってきた。年明け発刊に向け大詰めを迎えている今、少し振り返ってみる。私が第2号の編集メンバーに加わったのは1年前である。特集プロジェクトの編集担当をやってほしいと言われた。メールのやり取りがあまり好きではないことを知っていたかどうかは定かではないが、二つ返事で快諾したのは、想いのこもった一本の電話だったからである。よく社外の方には、「大林組らしさとは人柄です」と説明するのだが、まさにそれを感じた瞬間だった。そこから隔週での編集会議に参加し、毎回作成する企画書は、「今回はイケる!」と思い会議にかける。あえなく撃沈することなど頭から外れている。いやむしろ外しているという表現が正しいかもしれない。器用なのか不器用なのか…。設計者とはそんなものである。編集作業を通じ、若手設計者と繋がりを持たせたのが一番の感謝である。彼らと一緒に設計したいと思えた。若い時は、早く年をとりたいと思っていたが、もう若手とは言えない年齢に突入してしまった。ただ、若手に戻りたいと思わないのは、今を楽しめているからだと思う。そして今日も、提案と人柄を知ってもらべく血の通ったやり取りをひたむきにおこなっていく。 (堤裕二)

「建築と人」にフォーカスした大林組設計部のブランディングをする情報誌・第2号を発刊する。そもそも我々(建築/構造/設備設計者)は、雑誌づくりなど知らなかった。建物のつくり方を実践で学んでいるのと同様、雑誌のつくり方も実践かつ短工期で学んでいった。台割、入稿、色校、ノド…、普段聞きなれない専門用語は建築用語に置き換え、理解を深める。雑誌をつくっているはずなのに「このタイミングで基本設計の見直しはスケジュール上、間に合わない」という設計作業に置き換えたやりとりもした。限られた誌面の中、このプロジェクト、この写真で言いたいことは何か。であれば写真はどの角度で、どのような物が写っていて、人はどのような雰囲気…。通勤電車で揺られながら、気づけば限られた枚数しか撮れない(掲載できない)情報誌上での竣工写真のことばかりを考えていた。情報誌の編集は、実は建築の設計にも通じるところが多くあったと思っている。第2号の編集を(ほぼ)終え、気づけば今年もあと残りわずかとなってしまった。第2号の内容を温かい目でお楽しみ頂くと共に、現在別チームで編集作業を並行して進めている第3号の発刊についても楽しみにお待ち頂ければ嬉しく思う。 (松野健太郎)

総括	川口晋	掲載作品概要	武蔵野音楽大学江古田キャンパスプロジェクト (p.12)
編集長	上原耕	所在地	東京都練馬区
編集	井上潔 岩崎大祐 梅野麻希子 川鍋道広 嶋原悟 堤裕二 根本智子 林祐輔 松野健太郎 箕浦浩樹 安武剛 藁科誠	延べ面積	約24,700㎡
協力	山崎直子 小原景介 深瀬陽平 吉田達矢 松田良介 山本明陽 梶原鏡子 堀口武士 星枝美 松下尚嗣 鳥海和之	階数	地上5階、地下1階
写真	川澄・小林研二写真事務所 表1-4/表2-p.1/p.4/p.12-13/p.14/p.15/p.16/p.17/p.18-19/p.20-21/p.24-25 株式会社アマナ p.2-3/p.14/p.22/p.23/p.28-29(上)/p.29(下)/p.30/p.39(下)/p.43(下) 望月ロウ p.6-7/p.8(上)/p.9(右)/p.10(左) エスエス東京 p.26-27 エスエス大阪 p.37/p.38/p.39(左上)/p.39(右上) 株式会社MONSTER DIVE p.33/p.34(上)/p.34(下)/p.35(下) 株式会社伸和 p.41/p.42(上)/p.42(下)/p.43(上) eco-id p.46(左下)/p.46(右下)	竣工	2017年1月
		受賞歴	SDA賞2017
		JOSAI I-HOUSE 東金グローバル・ヴィレッジ (p.20)	
		所在地	千葉県東金市
		延べ面積	約2,800㎡
		階数	地上5階
		竣工	2016年1月
		受賞歴	グッドデザイン賞2016 JCDデザインアワード2016 BEST100 シカゴアテネウム国際建築賞2017 Iconic Awards 2017 DFA Design for Asia Awards 2017 German Design Award 2018
		大正大学15号館 地域構想研究所 (p.26)	
		所在地	東京都北区
		延べ面積	約2,200㎡
		階数	地上10階
		竣工	2016年3月
		受賞歴	グッドデザイン賞2017 SDA賞2017
		六花の森 (p.32)	
		所在地	北海道河西郡
		受賞歴	AACA賞特別賞2010 生物多様性保全につながる企業のみどり100選2010 日本建築学会賞2011
		漢検 漢字博物館・図書館 (p.36)	
		所在地	京都府京都市
		延べ面積	約6,800㎡
		階数	地上3階
		竣工	2016年4月
		受賞歴	「京(みやこ)環境配慮建築物」奨励賞2017
		大阪センター (p.40)	
		所在地	大阪府
		延べ面積	約15,000㎡
		階数	地上5階
		竣工	2016年1月
		受賞歴	SDA賞2016
		企画・発行	株式会社大林組本社設計本部 東京都港区港南2-15-2
		連絡先	03-5769-1564
		発行日	2018年2月28日

本誌掲載の記事・写真・イラストの無断転載および複写を禁じます。

ARCHITORIUM
OBAYASHI DESIGN PROJECTS



